

Title	祝島から仙崎へ：<文学>から<近代>を問う旅
Sub Title	From Iwaishima to Senzaki: a journey to the modern age through literature
Author	川村, 晃生(Kawamura, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.95, (2008. 12) ,p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩松研吉郎教授高宮利行教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

祝島から仙崎へ

——〈文学〉から〈近代〉を問う旅——

川村 晃生

一

二〇〇八年七月一日、春学期の最後の講義を終えた私は、そのまま広島まで西下して投宿、翌朝柳井港に向った。環瀬戸内海会議が主催する〈「周防の生命圏」から日本の里海を考える〉というシンポジウムと、開催地である祝島およびその周辺の現地調査に参加するためである。

祝島は『万葉集』（巻十五）にその名が見える。巻の冒頭を飾る〈新羅に遣わされた使人たちが、離別の悲しみや海路の旅の傷心、また詠歌にふさわしい場所であつた古歌〉として伝えられる歌群の中に見えるものが、それである。引用しよう。

家人は帰りはや来と伊波比島齋い待つらん旅行く我を（三六三六）

（家の者は早く帰つて来いよと忌み慎しんで祈り待っていることだろう。新羅への旅に向かう私を）

草枕くさまくし 旅行く人を伊波比島いぱひじま幾代いくよふ経るまで齋いい来にけん（三六三七）

（草枕） 旅にある人々をこのいわい島は、どれほど長い年月、これまで慎しんで祈ってきたことだろうか）

この「いわい島」は、一時期「岩見島」と呼ばれたことがあるが（岩石が多いためかと伝える）、明治九年（一八七六）に祝島の古名に復したという（『山口県の地名』日本歴史地名大系36、平凡社）。従って古くはこの『万葉集』のとおり、「いわい島」であつたと考えていい。

ところでこの「いわい島」が現在の祝島に同じかどうかという問題は、「いわい」が意味する内容とともに、少しく検討しておく必要がある。 「いわい」はいま「祝」をあてるが、もともとそれは慶事を喜ぶといった「めでたい」の意味ではなかつた。言うまでもなく「いわい」は「齋い」で、「①忌み慎しんで吉事を求める。ことほぐ。祈る。②神聖なものとしてあがめまつる。神をまつる」（『時代別国語大辞典 上代編』三省堂）の意で、宗教的なし信仰的行為を示すものであつた。従つて右の二首は、旅の無事や安全を祈る行為としての「いわい」の意味が籠められていると解釈するのが最も分り易い。

武田祐吉『万葉集全註釈』は、祝島の名称の由来を次のように説明する。

小島だが、最高所は、三五七メートルあり、これから西方は茫々たる周防灘にさしかかるから、特にこの島の神を祭つて行つたので、伊波比島の名があるのだろう。

私も現地調査のあと、移動の車中で祝島の名称について考えをめぐらしていた時の第一感、それであった。地図でも確認できることだが、瀬戸内海の群島伝いに航行してきた船は、この祝島を最後ににわか外洋に赴くかの感を深くする。瀬戸内海の複雑な潮の流れを読み、潮目をかいくぐり抜けてきた船が、今度は周防灘のまったく鳥影の見えない茫洋たる海に漕ぎ出していく、そういう分岐点に祝島があることからすれば、そこが航海の安全を願う祈りの場所であったとしても何ら不思議ではない。もともとそうした祭祀の痕跡が、いま祝島に伝存しているわけではないので確定は難しいが、少なくとも伊藤博『萬葉集釋注』（集英社）が周防灘の代りに「大島の鳴門」（大島の瀬戸）の危険性を想定し、祝島を大島（屋代島）の一部に比定する説よりも、現祝島をあてる説の方が実感としては受け入れ易いであろう。

一方長崎市の南西の海上に浮かぶ伊王島も、祝島の別称を持つ。この島の祝島という名称の由来は、「神功皇后が新羅への遠征の時船津に寄港し、島の景観を賞して祝詞を与えた」（『長崎県の地名』日本歴史地名大系43、平凡社）ことから発したとされている。美しい景観がそれを眺める人に深い感動を呼び起こし、そこに神性を感じて祭祀するに及ぶということ、神亀元年（七二四）一〇月、和歌浦（和歌山市）を訪れた聖武天皇がその余りの美景に強く心を動かされ、同地に玉津島の神を祀ったという歴史的事実（『続日本紀』『万葉集』）に照らしてみても、十分に納得されることであろう。そのことを念頭に置いて再び祝島に戻れば、祝島、長島、屋代島等の群島が造り上げる瀬戸内海の景観美は、航行の人々にとってはここを以て終点とし、ここを以て入口ともするのである。西田正憲『瀬戸内海の発見』（中央公論社）は、瀬戸内海の景観美の発見に江戸時代における朝鮮通信使をはじめとする外国人たちのまなざしが大きく関与したことを指摘するが、日本人も決してそれに無関心であつたわけではない。現にたとえばさきの『万葉集』の祝島を詠んだ歌群の冒頭にも、

真楫貫き船し行かずは見れど飽かぬ麻里布の浦に宿りせましを

(梶を取りつけて船が行かないのなら、このいくら見ても見飽きない美しい麻里布の浦に宿をとろうものを)

という麻里布の浦(岩国市室の木町辺)の景観美を詠んだ歌が見出されるのであり、瀬戸内海はその無類の景観という点からも古代の人々の心を魅了していたのである。

それでは祝島の「いわい」は、行路の無事の祈念に基くのか、それとも景観美に触発された祭祀行為に基くのかということについて言えば、実はそうした二者択一的な判定や憶測に、私はあまり関心がない。二つのことの間にはそれを決するような決定的な材料はないのだし、右の二つの考え方以外の別の考え方だって成り立つかもしれないのだ。大事なことは、右に挙げたような何らかの根拠によって、祝島及びその一帯が古くから宗教的ないし信仰的環境を色濃く持っていたということである。昔の人々にとって、そこは或る精神的な神々しさを漂よわせる場として認識されていたということを、私たちはいま確認しておけば十分であろう。

一一

昨今コンクリートなどによってひどく人工化された瀬戸内海の海岸風景の中で、この祝島一帯はリゾートホテルなどの高層ビルも臨海工場群もなく、自然海岸が高い比率で残っている数少ない地域である。そのためであろう、この祝島に向い合う長島の辺りには、他の地域では絶滅や危機に直面している諸生物、たとえばスナメリ、ナメクジウオ、カサ

シヤミセン、ハヤブサのほかナガシマツボなどの多種多様の貝類等が生息し、豊かな生態系を作り上げている。なかでもスナメリは世界最小のクジラのなかま（体長一・五～一・八m）として知られるが、一九七〇年代には瀬戸内海のどこにでも見られたのに二〇年ほどの間に激減し、長島一帯はスナメリの最後の生息区域になりつつあることが海洋学者によつて指摘されている。

また近時、同地域において国指定の天然記念物である鳥類のカンムリウミスズメとカラスバトが発見されている。中でもカンムリウミスズメは日本特産種で、推定生息個体数が最大で約一万羽と言われており、国際自然保護連合のレッドリストでは危急種に指定されている。つまりこの海域は、そうした鳥たちの最後の砦なのだ。そしてまたそのことは、この辺り一帯が彼らの有力な繁殖地として稀有な場所であることを示している。そこは営巣地たる岩の隙間などを擁した自然の陰影に富む地勢なのである。

さてこのような最後に残った瀬戸内海の原風景ともいふべき場所に、中国電力が原子力発電所の立地計画を着々と進めている。上関原発（かみのかせき）がそれで、長島の田の浦に改良沸騰水型二基（熱出力一三七・三万kw）を建てようとするものである。用地面積は約一六〇㎡、うち敷地面積は約三〇万㎡で、これによつて田の浦の約一五万㎡の海が埋め立てられることになる。そしてすでに該地では、海岸線に人工の手が加えられ始めてもいる（次頁図A）。

そもそも事の起りは、一九八二年一〇月に中国電力が上関を原発の有力地と発表したことに始まり、以後立地環境調査が進められる中で、四代正八幡宮神社の林官司や氏子たち、また祝島漁協の漁民たちの訴訟に及ぶ反対運動が起り、また周辺住民の半数を越える建設反対の意志が示されてきたにもかかわらず、建設計画は一步步進められてきている。そしていま二〇〇八年八月現在で、中国電力が公有水面の埋立許可申請を提出し、いわば最後の攻防の局面を迎えている。



図 A 埋め立てられる田の浦。すでに付帯工事が始まっている。

るのである。

いったいここに原発が造られたらどうなるのであろうか。それは単に田の浦が埋め立てられるという自然破壊にとどまるものではない。原発からは常時微量の放射能を含んだ冷却水が海に放出される。この上関原発でも毎秒二基分一九〇m³の冷却水の放出が想定されているが、この冷却水は一般的に海水温度を平均七度C高めるとされる。従ってこの冷却水が、使用後は温排水として海を温め続けることも考慮されなければならぬ。しかもその量たるや、日本の原発五五基からは年間一〇〇〇億トンが吐き出され、それは日本の全河川量四〇〇億トンの四分の一にあたっている。原子力発電所を「海温め装置」と呼ぶ原子力学者もいるほどに、この温排水の問題は軽視できないのだ。つまり田の浦を埋め立てて原発が造られれば、海浜とその自然景観が失われるだけでなく海水温が高まることも予測されなければならない。しかも微量ながら放射能も放出されて、ということだ。日本生態学会自然保護専門委員会は、カンムリウミスズメの発見に伴って、希少鳥類への影響評価の要望書を環境省その他関係機関に提出したが、その結果を俟つまでもなく、原発建設による生態系への影響は想像に易いであろう。それはまち

がいなくスナメリやカンムリウミスズメをはじめとする諸生物の生息状況の貧困化をもたらすにちがいないのである。さて、ではこうした問題を構造としてどう捉えたらよいのだろうか。或いはこうした状況は何を意味しているのだろうか。さきに述べたように、この辺り一帯は古代において宗教的な聖地であった。そこにきわめて近代的な構築物としての原発が持ち込まれたのである。図式として言えば、それは古代と近代の対立的構造をあらわにしていると言うことができる。そしてそれは該地に限らず、これまでこの国でいくたびとなく繰り返されてきたことでもある。その場合、いつたい近代は古代（あるいは前近代）に対してどう意味づけられるのか。とりわけ近代のとり返しのつかぬ弊害として深刻な環境問題を抱え込んだ私たちにとっては、その意味づけがいっそう重要になってくるであろうことは言うまでもない。私はこの稿の中で自らにその答を迫らねばならないのだが、何はさておきまずは続く仙崎への旅を急ぐこととしたい。

三

祝島での予定の行程を終えた私は、その足で美祢線を乗り継いで山口県長門市の仙崎を目指した。仙崎は童謡詩人金子みすゞの生れ育った町である。みすゞは明治三六年（一九〇三）に生まれ、昭和五年（一九三〇）に自死するまで、わずか二六年の生涯を送るにとどまったが、その間に五〇〇を超える詩篇を残し、近年ますますその名声を高めつつある。それは童謡詩人と言われながらも、その詩が（生きる）ことの本質的な問題を内包しているがゆえに、万人に訴えるものを深くひそめているからであらう。

みすゞは生前、雑誌『童話』その他に投稿し、詩人西條八十に認められるなどして詩人たちの間ではある程度知られ

ていたが、社会的にはほとんど無名に近かったと言っている。その彼女を戦後に発掘したのは、詩人矢崎節夫（一九四七年生）であつた。彼は学生時代にみずゝの一篇の詩と出会い、衝撃を受けて、以後みずゝの詩の探索の旅に立つことになるのだが、その一篇の詩というのは次の詩であつた。

大 漁

朝焼あさやけ小焼こやけだ／大漁だ

大羽おおば鰻いわしの／大漁だ

浜は祭りの／ようだけど

海のなかでは／何万の

鰻いわしのとむらい／するだろう

（／は改行を示す）

いまはみずゝを代表する有名な詩となつたが、誰でも初めてこの詩に接した人は、「鰻のとむらい」というその一語に衝撃を受けるにちがいない。大漁を喜ぶ人間の視点から、獲られる鰻の側にすぐさまなごしを転換し、すつと鰻の方に身をすり寄せていく、その着想と詩の方法に誰もが虚を突かれるのである。そして私がさきに「（生きる）」ことの本質的問題」と書いたのも、ここに関わっている。

私は長い間、彼女の詩的才能もさることながら、こういう個性を育んだ仙崎という町とその風土はどのようなものを

ひそめ持つているのかということに、深い関心があった。それというのも、みすゞの「仙崎八景」という連作詩の中の一つ「王子山」に、次のような一節があるからである。

木の間に光る銀の海、

わたしの町はそのなかに、

龍宮みたいに浮んでる。

銀の瓦と石垣と、

夢のようにも、霞んでる。

王子山から町見れば、

わたしは町が好きになる。

仙崎の対岸に青海島（おみ）という小さな島がある。いまは橋が懸っているが、以前は渡し舟で行き来したのである。その青海島のとつつきに王子山と呼ばれる小高い場所があり、その高みから仙崎を望んでよまれた詩である（次頁図B）。みすゞはこの詩で、仙崎を「龍宮」のようだと言ひ、「わたしは町が好きになる」と言っているのだ。仙崎の町と風土が、みすゞの為人とその詩に影響を与えなかったはずがない。私はそう確信し、一度仙崎を訪ねなければならないという責務のようなものを感じつつ、一方で淡い期待を寄せていたのでもあった。

仙崎の風土がみすゞに詠ませたとと言えるような詩として、次の作品がある。

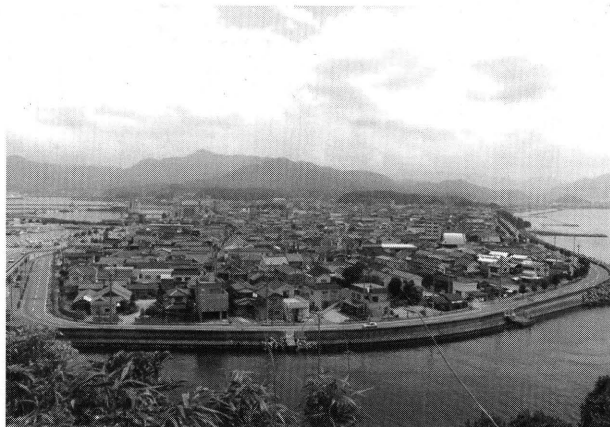


図 B 王子山から見た仙崎の町。「海に浮んだ竜宮」がこれ。

お
魚さかな

海の魚はかわいそう。

お米は人につくられる、

牛は牧場まきばで飼われてる、

鯉もお池で麩ふを貰もらう。

けれども海のお魚は

なんにも世話にならないし

いたずら一つしないのに

こうして私に食べられる。

ほんとに魚はかわいそう。

漁業が住民の主たる生業である仙崎であるからこそ生れた詩と云っていいだろう。末尾の「ほんとに魚はかわいそう」の一行は、さきに挙げた「大漁」の「鯉のとむらい」に通じる感性であり思想である。日々魚を獲って食卓に載せる仙崎の日常生活が、みずゝの眼を通して新たに見つめられ、〈いのちの風景〉が新たに写し取られていく。



図C 向岸寺の「くじら墓」。いまでも清浄に保たれている。

また仙崎は捕鯨の町でもあった。青海島の東端、向岸寺の清月庵（長門市通裏）には、「くじら墓」が現存する（図C）。元禄五年（二六九二）に建立されたその墓碑は仙崎湾を見下す高台に立つが、鯨のふるさとたる青々とした海面に臨んで、いかにも鯨の鎮魂を祈るにふさわしい。森田勝昭（『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会）は、「墓碑の下には七〇頭以上の鯨の胎児が眠っている」と述べ、向岸寺には文化文政期以降に捕ったすべての鯨の戒名、捕獲場所、種類、体調、値段、年月を記した過去帳があり、現在も毎年四月から五月にかけて五日間の法要（鯨回向）が行われていることを、樋口英夫らの著書によって指摘している。みすゞの「鯨法会」という詩は、そうした歴史と風土の中から生まれたものだ。

くじらほうえ
鯨法会は春の暮れ、
海に飛魚採れるころ。
とびうお
浜のお寺で鳴る鐘が、
みのも
ゆれて水面をわたるとき、
りようし
村の漁夫が羽織着て、

浜のお寺へいそぐとき、

沖で鯨の子がひとり、

その鳴る鐘をききながら、

死んだ父さま、母さまを、

こいし、こいしと泣いてます。

海のおもてを、鐘の音は、

海のどこまで、ひびくやら。

一読すれば分るであろう。ここにも「鯉のとむらい」の思想が表われている。みずゞは獲られる鯨の側に身を寄せているのだ。

これは一言につづめて言えば、いのちの思想という問題である。私はここ数年間、大学の教室でいのちの問題を一つの大きなテーマとし、二〇〇八年度の春学期もそれをさまざまな角度から考えてきた。いのちという問題は捉え方も多様であるし、毎週学生たちが提出する百数十枚のリアクションペーパーも区である。いのちの問題に正解はなく、その答は各自が自分で考え見つけ出さねばならないという点で個別的なものでもある。そのような状況の中で、金子みずゞの詩はそれを語る上でもまた学生諸兄に考えてもらおう上でも、恰好の材料であった。だから私はしばしばみずゞの詩を教室で組上に載せたが、仙崎への旅はそれにひそむものが何なのかを自分自身で確認しようとする旅でもあったと言えるよう。

四

みすゞの「仙崎八景」の中に、「極楽寺」という作品がある。

極楽寺のさくらは八重ざくら、
八重ざくら、

使いにゆくとき見て来たよ。

横町の四つ角まがるとき、

まがる時、

よこ目でちらりと見て来たよ。

極楽寺のさくらは土ざくら、

土ざくら、

土の上ばかりに咲いてたよ。

若布結飯わかめむすびのお弁当べんとで、

お弁当で、

さくら見に行って見てきたよ。



図D 極楽寺の門前。写真の手前の道沿いに桜がある。

極楽寺（図D）はみずゝが育った金子文英堂からすぐの所にあり、彼女の幼時からの遊び場の範囲の中にあつたと思われる。門前の桜はたしかに「使いにゆく時見て来たよ」という程の、日常的な風景であつたにちがいない。

さて、少なくとも仙崎八景はすべて歩いてみようとかねて決めていた私は、いまは金子みずゝ記念館となつてゐる金子文英堂をあとにして、その次の極楽寺へと足を向けた。午後二時頃の、あまりの暑さに辟易していた私は、境内の井戸水を借りて顔や頭や腕を洗い、木陰のベンチに腰かけて汗が引くのを待っていた。

するとそこに御住職が現われ、とりとめのない会話が始まつた。私は一度仙崎を訪れたと思つてゐたこと、仙崎が落ち着いた静かな町であることに安堵したことなどを話し、そしてみずゝが詩に詠んだ桜はこのベンチの上を覆っているそれなのだろうかと思つた。すると御住職は、その桜は門前の通り沿いのもので、みずゝは「横町の四つ角まがる時」に「よこ目でちらりと見」たのですから、と説明され、私はなるほどと得心した。

そのうちに話は意外にも、鯨の話に移つていった。それがこの旅での

大きな収獲になることに、私はあとで気付くことになる。

「鯨はね、猫のような細かい声で鳴くのだそうですよ。あの大きな体でね。」

その鯨が捕えられて、断末魔を迎える時が来る。鯨の捕殺がきわめて残酷なものであることは、森田勝昭（前掲書）によつて指摘されている。和歌山県太地の例で言えば、捕殺の用具は鉋もろと剣で、鉋には矢縄が付けられていて、それが鯨の体に巻きついて鯨の動きを止め、最後に剣（大剣、中剣、小剣の種類がある）でどめを刺す。打ち込まれる鉋は一頭につき約二〇〇本、また剣を脇壺（肋骨の肺の部分）に刺し込むと、噴水のように血潮が吹き出して、鯨は大きな声を放つて荒れ狂うという。

「鯨組の中からこれと思う若い男を選んで、出家させて修行に出し、この寺を歴代継がせてきたのだそうです」

鯨組とは一七世紀頃に成立した鯨を捕る共同体組織で、藩が直営することも少なくなかったという。その鯨組から選ばれて出家した男を僧職に就かせ、鯨の霊を弔なぐさめたのである。残酷に殺すがゆえに、死後を弔なぐさめずにはいられなかったであろう深い懊悩がひとと心を打つ。

私は、この寺にも何か鯨の捕殺に関わる遺品が今も残されているのかと尋ねた。すると位牌が残されているという。見せていただけるのかと尋ねると、案内して下さった。江戸時代のもの、近年新しく作つたものの二つが並んで堂の



図E 極楽寺に残る鯨の位牌。左手のものが新しい位牌。

中であつた(図E)。位牌の中央に「南無阿弥陀仏」とあり、その左右に「業尽^{ゴウジン}有情^{ウジョウ}、雖放不生^{スイホウフシヨウ}、故宿人天^{コシュクニンテン}、同証仏果^{ドウショブツカ}」(位牌にはルビなし)という、獣に引導を渡して後生を安からしめるとされる諏訪明神の偈^げがある。この偈は動物を殺す際、その魂を救う呪文として全国的に普及していたらしい(千葉徳爾『狩獵伝承』法政大学出版局)。

向岸寺だけではなかつたのである。仙崎という町では、鯨の死後儀礼としての弔いが日常的に行われていたのだつた。つまりみずぐは小さい時から「鯨のとむらい」を目にしていたのである。とすればみずぐが「大漁」の詩に、「鯨のとむらい」の言葉を刻み込み得たのもけだし当然であらう。「鯨のとむらい」の背後には「鯨のとむらい」があつたのだ。

さて、このような古く『万葉集』にも「鯨^{いさな}とり」と呼ばれた捕鯨(捕殺)の方法に対して、近代の方法はどうであらうか。それは一言で言えば鯨の苦痛を軽減し、ほとんど即死に近い状態で捕殺する方法の開発を目指すものであつた。しかも沿岸捕鯨から遠洋捕鯨へと転換し、船団を組んで大量の鯨を捕獲することが可能になった。それは戦後の日本人の乏しい食卓を賑やかに飾って、大いなる栄養を供給してくれたが、実はそこで失われたものが二つあつた。一つは鯨の断末魔の悲鳴を聞けなく

なったこと、また一つは鯨の捕殺の場面が人々の視界の彼方に遠ざけられたことである。戦後間もない一九五〇年六月、岩波書店から岩波写真文庫というシリーズの刊行が開始されたが、その第一回配本の五冊の中に『南水洋の捕鯨』という一冊がある。そこに収められる約一〇〇枚ばかりの写真を眺めても、そこには鯨たちの悲鳴は聞こえては来ず、また他人事ひとごととして船員たちの苦勞が偲おもばれるだけである。

いったいこの鯨の捕殺をめぐる古代（あるいは前近代）と近代の差異は、何を意味しているのだろうか。私たちはここにも冒頭の祝島の原発問題をめぐる状況と同様に、古代と近代の対立構造を見て取ることができるのだが、それをふくめていまその問題により深い考察を加えてみたいと思うのである。私たちが鯨の悲鳴から遠ざかったこと、捕鯨という行為がまったく他人事になってしまったこと、実はその二つは別の事々なのではなく一つのことだったのではなからうか。鯨に限らずあらゆる動物の屠殺に関しても同じ事が言えるであろうが、福岡賢正（『隠された風景』南方新社）のルポが指摘するように、私たちはすべての屠殺の現場に対して完全に目隠しされてしまっている。そのために私たちはいま、いのちへのまなざしを閉ざしながら加速度的にいのちへの感性を鈍らせていると言えよう。それはいのちの虚失化ということであり、また別の言い方をすればいのちの不可視化とも生命感覚の鈍化とも言っていいたいだろう。私が一つのことというのはそのことである。いま私はかりにそれを〈生命リアリズムの喪失〉という言葉で括くくっておきたいと思うが、私が極楽寺のできごとから右のように考えを進めていったのは、その〈生命リアリズムの喪失〉という現象が近代という時代およびそこに生きる人間を読み解いていく重要なキーワードになるのではないかということを直感したからである。そしてそのことは、もともと私が教室やその他の場所でのちの問題を語り、考えてきたことに発していると言えるかもしれない。

五

では近代を〈生命リアリズムの喪失〉という観点から考えると、何がどう説明されるのかを述べてみよう。私が近代をいのちという視点から捉えてみようとしたのは、右に示した福岡賢正の著書をはじめとするさまざまな〈いのち〉論に触れたからでもあるが、もう一つ別の刺激を受けていたからでもある。言うまでもなく近代という時代を特徴づけた下支えしてきたのは科学やテクノロジーに基く文明であつた。近代という言葉は科学ないし文明という言葉に置き換えることは、ほとんど常に可能である。環境問題と向い合つてきた私は、近代における科学の限界を考えその欠点をあぶり出さなければならぬことを責務のように感じていた。そのような中で、私は哲学者中村雄二郎の『臨床の知とは何か』（岩波書店）にめぐり合い、そこで中村が「近代科学が無視し、軽視し、果ては見えなくしてしまった〈現実〉」の一つとして〈生命現象〉を挙げていることを知つた。その時私は、徐々にではあるが自分の考えていることの道筋が見えてきたような感を覚えたのだが、こうして問題は、近代（＝文明）と〈生命リアリズムの喪失〉という形に絞られてくることになる。

具体的事例を思い浮ぶままに列挙してみよう。たとえば公害病の典型である水俣病がそれをよく説明してくれる。水俣病はチッソ株式会社がアセトアルデヒド——それはプラスチックをはじめとする近代の石油文明を支える重要な資材であつたが——の生産をすべてに優先させたがために、不知火海の魚介類とそこに住む漁民たちの生命を貶めてはばからない、という意識構造の中から産み落とされたものであつた。そこには当然のことながら経済的利益への飽くなき欲望が渦巻いてい、そのためにアセトアルデヒド生産に伴う有機水銀の排出を放置するという状況が何年にもわたつ

て続いたのだが、そのことはとりもなおさず人間をふくむ生命というものへの実感が欠如していたことを証明している。そしてそれへの謙虚な反省がなされなかったことが新潟水俣病の発生を招き、またすべての公害病の発生の原因ともなっている。

あるいは近代における都市への人口集中という事態も、〈生命リアリズムの喪失〉という問題を深く内包している。近代工業文明は資本主義経済のもとに、その労働力を確保するために都市に多くの人間を呼び込むことになった。商業や住宅の用地確保のために、都市の自然は壊されコンクリートジャングルの無機質の空間が生成されてゆく。いきおいそこに営まれていた生態系は壊され貧困化し、生命を実感できない人間と場所が増殖してゆく。大都市はいわば〈生命リアリズムの喪失〉のシンボリックな場所と捉えることができる。

またさらに近代を特徴づける通信技術の発達は、電話、テレビを越えたその極地とも言うべきインターネット技術に見られるように、現実の虚像化という現象を強力に押し進めている。生命もその〈現実の虚像化〉の中に組み込まれ、「殺ス」「死ネ」という言葉がネット上に氾濫する状況呈するようになった。

一方私たちが日常生活の中で最も文明というものを享受していると思われるさまざまな家電製品も、実はその背後に〈生命リアリズムの喪失〉という問題をまぎれもなく抱えている。それはひとえにエネルギーの確保という点にかかっているのだ。家電製品はエネルギーが供給されなければ無用の長物に等しい。そこでエネルギー確保の現場に目を転じてみよう。日本の電力供給は、いまだ自然エネルギーは数値化に程遠く、目下火力（石炭と石油）と原子力と水力に頼っている。そしてそれらはすべて、生命の犠牲の上に成り立っている。火力は地球温暖化による生物相の貧困化及び資源の涸渇化を招く可能性を孕み、水力は河川と海の生態系を破壊する原因となっている。そして何より原子力は、その放

放射性排出物によって人間をはじめとするもろもろの生命と生態系に決定的な打撃を与えていく。つまり家電製品は、それらの犠牲なしに稼働できないのだが、そのことを意識できる電力の消費者はきわめて少数である。ではなぜそうなのかと言えば、エネルギーの生産地と消費地がまったく別だからである。エネルギーの消費者の圧倒的多数たる都市住民に、それを生産する地方の現場で何が起っているのかは伝わっていないし、消費者もそれを知ろうとはしない。従ってこういう状況の中では、〈生命リアリズムの喪失〉が都市民を中心に恒常化されていつて当然なのである。なお近代における大量破壊兵器の開発が、刀や槍とは異なつて生命を奪う実感を限りなく無にするという点において、戦争という場における〈生命リアリズムの喪失〉を引き起していることも重要な問題だが、もはやそれに触れるスペースはない。

さてここまで論を進めてくれば、私たちは冒頭の祝島の問題にすぐさま繋がることができよう。長島原発建設は、こうした〈生命リアリズムの喪失〉という問題をもろに露出させて現実化したということだ。さきに述べたように、海浜の自然環境を破壊した上での海水温の上昇と放射性排出物の放出は、まちがいなく当該地域の生物や住民の生命に影響を与える。また原発はさまざまな原因による事故の可能性をも秘めている。そうした生命の脅威への想像力が原発の建設を推進する側に欠如しているということ自体が、まぎれもなく〈生命リアリズムの喪失〉を示しているのだと言えよう。

かつて祝島が宗教的な聖域であつたことを冒頭に書いた。どのような理由からかは決め得ないにしても、宗教的な聖域であつたことはそこで神への祈りがなされたことを示している。昔も今も変わらないが神に祈ることと言えば、生命の安全と魂の平安の二つ以外にははずだ。つまり祝島とその一帯は、古来生命の安全が願われた所なのだ。そこに生命の安全を脅かす原発が造られようとしているのである。私が言おうとしている古代と近代の対立構造とは、こういうこ

とであつた。そして近代とは、まぎれもなく人間からのちの実感を奪い取つていく装置として働くものであつたのだ。
灰谷健次郎（「世にも美しく、そして世にも恐ろしい物語」『灰谷健次郎の発言』（6）岩波書店）が伝える、沖縄・渡嘉敷島の年寄りの言葉が耳に残る。

ものはたんなるものじゃない。ものにはみな生命^{いのち}がある。人間はそれを金に換えるようになって、ダメになつてしまつた。

文明は一方で経済的価値すなわち金を生むのであり、文明と金はほとんど等記号で結ばれている。近代がその文明と金のシステムの中に飲み込まれているとすれば、渡嘉敷島の年寄りが言うようにそこにいる人間はダメになつていくしかないであろう。はたして私たちにその「ダメになつていく」覚悟があるのだろうか。

付記

引用本文などの歴史的仮名遣いはすべて現代仮名遣いに改めた。また本稿をなすにあたり、極楽寺御住職吉岡光雄氏から御教示を忝くした。記して謝意を表したい。なお本稿は二〇〇八年度慶應義塾学事振興資金に基づく研究成果である。